松前良昌・三村真弓・濵本恵康(2018),「協働的問題解決授業を実現する手立てについての事例研究
－音楽科合唱指導における授業デザインの提案－」,広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第 49 集」,31－37.

協働的問題解決授業を実現する手立てについての事例研究

－ 音楽科合唱指導における授業デザインの提案 －

松　前　　良　昌　・　三　村　　真　弓*　・　濵　本　　恵　康*

１．広島大学附属東雲中学校における授業デザインの視点

広島大学附属東雲中学校(以下,本校と略記)では，平成 27 年度より「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を培う教育の創造を研究テーマとし，研究を進めてきた。本校ではまず，グローバル時代をきりひらく資質・能力を，子どもの主体性・協働性・多様性の３つの特性から捉えることとして,「さまざまな文化や価値観を理解し，多様性を認め合いながら自分の考えを明確にして問題を解決する力」と定義した。次に，平成 29 年度の研究の目的を，グローバル時代をきりひらく資質・能力を育成するための協働的問題解決授業を実現する手立てを明らかにするために，合唱指導における授業デザインの視点を提案することにした。

平成 28 度６月の授業研修会をもとに，全教員が日々の実践において協働的問題解決がうまく生じた授業の要因をあげた。それらを整理したものが表１である。

表１　協働的問題解決を実現する授業デザインの視点（平成 28 年度版）

Ⅰ．授業前の構想　に関する視点
１　問題の設定 ①　身近な問いや切実感のある問い，社会や地域に貢献できる問題を学習題として設定すること ②　１つの概念について，多様な考えが出せる問題を設定すること ③　問題解決の結果が複数存在するようなオープンエンドの問題を設定すること ④　導入時に，子どもが本時の課題を確認し合う活動を設定すること ⑤　個人の問題解決から，集団の問題解決へ変化させなければならない状況を設定すること **２　学習方法** ①　自らの生活経験や既習の学習内容に基づく発言を数多く実現させること ②　対話の前に考えをまとめる時間を十分とり，すべての子どもが考えをもてるようにすること ③　子どもの中から「なんで」「どうして」といった言葉を生み出させるようにすること ④　子どもたちの表現・活動を動画で撮影し，自分の表現・活動をメタ的に考察させること ⑤　問題解決に向けて多人数の前で考えを発表することを目的とすること ⑥　操作活動や実験を設定して自分の考えを伝えたいと思う意欲を高めさせること ⑦　ジグソー学習法を用いること **３　その他** ①　問題解決が何につながる知識なのかを意識させること ②　問題解決の鍵となる考え方を繰り返し指導しておくこと ③　問題解決に向けた教師の働きかけを弱め，子どもの意見を重視すること ④　分かったつもりの状態をつくらないため，よく考えたグループの発表を最後にすること
Ⅱ．対話の仕方　に関する視点
１　対話の視点 ①　１つの視点に焦点化した話し合いをさせること ②　複数の考えの共通点を見つける対話をさせること ③　自分のもっている考えを基に，一段階抽象的な問題について対話させること ④　問題解決の評価の視点を子どもに与えておくこと ⑤　根拠とは何かを示し，根拠に基づいた対話をさせること ⑥　同じ体験や活動を基にすることで，同じ土台に立って対話させること

*広島大学教育学研究科
Yoshimasa MATSUMAE, Mayumi MIMURA and Yoshiyasu HAMAMOTO ; Case study on the way to realize collaborative problem solving lessons, Proposal of lesson design in music class chorus instruction

２　対話の進行

①　対話を単なる考えの報告会にさせないこと
②　グループ内のすべての子どもに自分の意見を述べさせること
③　グループ内で役割分担をさせないこと
④　男子と女子に分かれた話し合いをさせないこと
⑤　対話の時間を長すぎない程度の適切な長さに設定すること
⑥　次の発話者に，学習内容がつながる発話を数多く実現させること
⑦　多面的な考えを発言する子どもの考えをもとに，グループ全体の思考を促進させること
⑧　よい考えを共有させること
⑨　同意や提案ができるような，建設的な対話にさせること
⑩　付箋を活用して，対話における考えのグルーピングの変化の過程を可視化させること

Ⅲ．教師の介入　に関する視点

１　教師の基本的な姿勢

①　子どもの対話には積極的に介入せず，見守ることを基本とすること
②　教師の介入は，介入するポイントを限定すること
③　教師の介入は，子ども同士の意見を整理し，次の方向性を示す程度にとどめること
④　介入が必要なポイントには，繰り返し介入し，少しずつ介入の回数を減らしていくこと
⑤　理由をたずねあっているグループには介入しないこと
⑥　よい対話の進め方をしているグループを褒め，認め，そのよさを共有すること
⑦　言葉だけでなく，図・操作・動き・記号を対応させた説明を促すこと
⑧　子どもの思いに寄り添い，一緒に驚いたり喜んだりして，子どもの考えを価値づけること
⑨　子どもの考えが１つにまとまりそうなとき，「でも，〇〇と考えると…」と教師が反論して，子どもの思考を揺さぶること
⑩　問題解決の結果について，「どうしてわかったの？」等と問い，解決方法を自覚させること
⑪　「〇〇くんは，…したんだって」等，子ども同士の関わり合いを生む声かけを行うこと

２　意見がまとまらないグループに対して

①　まず１つ暫定的な同意を得るようにさせること
②　対話の視点を確認すること
③　子どもの思いや考え，発言や活動の理由を尋ねること

２．音楽科における授業デザインの視点

グローバル化する社会の中で，音楽のグローバル化も進み，様々な国の音楽の要素を取り入れた昨今のポピュラー音楽を通して，多様な音楽に親しむことができるようになっている。一方で，生活の中で他者とかかわりながら音楽を楽しむ機会は減少している。そこで，音楽の授業を通して，他者とかかわりながら多様な考えや表現の価値を認め，自己を表現する体験を創出させたいと考えている。

音楽科ではこれまで，学年の発達段階を考慮して，身につけた表現方法を選択し活用できる生徒を育てる指導を行ってきた。そのために，指導者が適切な場面で支援することによって，身につけた音楽的表現や技能などを曲のどの部分でどのように利用するかを自ら判断させ，創造的に表現させることができるような学習を企画してきた。

本年度の研究の目的は，通常の音楽科合唱指導から協働的問題解決を実現する授業デザインの視点を提案することである。

３．授業の実際と考察

本節ではまず，２学期に合唱コンクールへ向けて取り組んだ音楽科の授業を取りあげる。次に，その授業を観察・分析した資料を示す。そのために授業分析チームを結成した。メンバーは本校研究部員１名と広島大学教育実習生２名からなる観察者および授業者である。

3-1. 音楽科の授業～合唱コンクールへ向けた取り組み

授業について

本時は合唱コンクールへ向けて，最後の仕上げの段階である。授業の流れは①パート練習のポイントを助言，②生徒によるパート練習，③全体練習（本時は教師の指揮・指導が中心），④クラスでの練習に向けた助言となる。詳細については学習の展開に記載する。

次にパート練習の状況（全般，詳細な動き）であるが，本校１学年はソプラノ・アルト・テノールの混声三部で，アルトには変声期前の男子を含む。各パートとも，パートリーダーが中心となり，音取りは鍵盤ハーモニカ係がおこなう。また，必要に応じて，タブレット端末で撮影して確認することもある。合唱責任者は，クラス練習のリーダーであり，練習計画をはじめ，運営的にも技術的にもクラス全体を取りまとめる重要な役割である。パート練習中の指揮者・ピアニストは，自分たちで練習，もしくはパート練習に参加する。

そして，教員の関わりであるが，パート練習では出来るだけ事前に助言するようにしている。これまでの練習で，方法は理解しているので，途中であまり指導することはない。ただし方法が良くなかったり，発声に問題があったりなど，今すぐ指導した方がいいことはタイムリーに助言することを心がけている。全体練習の際は，授業では教師主導で指導している。助言の内容は，はじめは抽象的なイメージで伝え，自分たちでその解決方法を考えるようにさせる。それが難しいようであれば次第に具体的な解決方法を教えるようにしている。また，教師が指揮をして完成度の高い合唱を体験させることで，自分たちで演奏する際のゴールイメージをもたせるようにしている。

協働的問題解決を生起させるための手立て

○パートリーダーを中心にして声をかけ合う方法について適宜指導しておく。
○歌詞に関わる歌がもつ意味をあらかじめ伝えておく。
○比喩表現を用いて歌い方をわかりやすく伝えたうえで，自分で工夫して歌うように促す。

日　時　平成 29 年 10 月５日（木）　第５校時（13：40～14：30）
年　組　中学校第１学年２組　計 40 名（男子 20 名，女子 20 名）
場　所　音楽教室
題　材　合唱表現を工夫しよう！　～自分たちで高め合いながら（混声三部合唱）
課題曲「大切なもの」　山崎朋子 作詞・作曲
自由曲「１１ぴきのネコ」合唱版より
十一ぴきのネコが旅に出た　魚見えたか節　魚の子守唄　ノラネコ天国ソング
井上ひさし 作詞 ／ 青島広志 作曲 ／ 混声三部編曲：松前良昌（校内用）

本時の目標

１．自分の声の状態を理解し，音程・リズムなどの音楽的技能を活用して歌唱することができる。
２．曲想や声部の役割や全体の響きの調和を感じながら，表現を工夫して歌唱することができる。

学習の展開

学　習　活　動　と　内　容	指導上の留意点（◆評価）
１．パート練習 □発声や音程，リズムなどに注意して，パート別に活動する。 □パートリーダーが中心となって活動する。 □必要に応じてタブレット端末を活用する。	○表現を工夫する“術”を助言する。 ・腹式呼吸になっているか。 ・出だしの音からきちんと歌っているか。 ・息の流れがしっかり意識できているか。 ・発声法を意識して歌っているか。 ・口の開け方なとは適切か。 ・発音を適切にしようとしているか。 ・音程を正しく歌おうとしているか。 ・リズムを正しく歌おうとしているか。 ・強弱などを考えて歌おうとしているか。 など ◆自分の声の状態を理解しながら，音楽的技能を活かして歌うことができるか。 【音楽表現の技能】

２．全体練習 □主として生徒指揮，後に教師が指揮をする。 □発声や音程・リズムなどに注意して歌う。 □お互いの演奏を聴き合い，曲にふさわしい表現になっているかどうかを発表し合う。 ・ローテーション形式　など □歌詞の内容をもとに，協働して曲想に合った合唱表現を工夫する。 ・生徒指揮の指示 ・パートごとに生徒個々の曲のイメージなどを意見交換 など □部分ごとに曲想の変化をつけて歌う。	○演奏の状態に応じて音楽的技能を活用した“術”を助言する。 ・呼吸法や発声法に気をつけているか。 ・音程, リズム, 強弱などに気をつけているか。 ・子音の発音を工夫しようとしているか。 ・パートの声を揃えることを意識しているか。 ・他のパートを聴いて，ハーモニーやバランスをよくしようとしているか。 ・言葉の意味を伝えようとしているか。 ・曲想を考えて歌おうとしているか。 ・聴衆を意識して歌おうとしているか。など ○生徒の状況を常に把握することを意識する。 ・はじめは，あえて抽象的に指示して，自分でどう工夫するかを考えさせ，徐々にわかりやすく簡潔で具体的な指示をする。 ・生徒に最も適切な指示を選択する。 ◆歌詞の内容や曲想を考えながら, 表現を工夫して歌唱することができるか。【音楽表現の創意工夫】
３．まとめ □通して歌う。	◆自ら考えた表現の工夫をいかして歌唱することができるか。　【音楽表現の創意工夫】

3-2. チームで作成した資料

取りあげる対象　　１年２組　※インタビューは男子生徒１名，女子生徒１名の計２名

取りあげた理由

①　１年２組の様子

全体として合唱コンクールに向けて，努力し続けている。授業中も，多くの生徒がメモを取ったりしながら練習する様子が見られた。ただ，初めてのことで，どうがんばればよいのか，技能的にどのくらいのレベルをめざせばよいのか，ゴールイメージがつかめていない。そのため，集中力が続かない生徒がいたり，小さなトラブルが起きたりした。しかし，責任者がリーダーを集めて相談したり，授業で先生が言ったことをきちんと守って練習しようとしたりして，数々の困難を克服しつつある。これらのように，意識や技能の面での課題がある中で，メモを取るなど具体的な手立てを施し，難局を乗り越える様子が顕著に現れたためである。

②１年２組の全体の取り組み進行状況

合唱責任者の指示のもと，計画的に練習しようとしている。音程は比較的良く，順調に音を取ってきている。しかしながら，発声については，やや発展途上であり，すぐ地声になる男子が多い。全体として元気の良いクラスである。

③取り上げた生徒２名

Ｏくん…課題曲指揮者であり，テノールパートの鍵盤ハーモニカ係を兼任している。パート練習では実際にアドバイスを一番出している生徒である。音楽的にも知識・技能が高い。

Ｋさん…合唱責任者であり，自由曲ピアニストでもある。合唱責任者会で連絡したことをきちんと把握できており，行事運営の意図を理解している。また，日頃から，的確な指示を出して，練習を運営している。さらには音楽的にも知識・技能が高い。

クラス全体が少しずつやる気を出して頑張ろうという雰囲気になっているが，様々な課題の解決方法を知らない状況にある。そこで，リーダーに解決方法を伝えることで，出来るだけ生徒の力で問題解決していけるのではないかと考えている。このことからクラス合唱をよりよいものにしたいという強い意欲をもつリーダー２名を取り上げることとした。

４．授業デザインの視点を抽出する方法

本節では，まず，実施したインタビュー調査の方法と実際のインタビュー記録を示す。そして，そのインタビュー記録をもとに，音楽科合唱指導における授業デザインの視点について考察する。

4-1. 調査の方法

まず，授業前に広島大学教育実習生が１年２組の取り上げた２名の生徒に対して，インタビュー調査を実施した。質問内容は，主発問を「これから音楽の授業を受けるにあたって，今考えていることを教えてください。」とした。この発問を選んだ理由は，生徒に負荷をかけることなく，自然に考えていることを表出させるためである。

そして，授業後にも同様に２名の生徒に対して，インタビュー調査を実施した。質問内容は，主発問を「音楽の授業を終えて，今考えていることやできるようになったことを教えてください。」とした。この発問を選んだ理由は，生徒から率直に考えていることや自分で捉える変化の様相を表出させるためである。実際には，この発問の他に，生徒が回答した内容について詳細に尋ね返す発問も行った。

インタビュー調査の内容は，広島大学教育実習生がフィールドノートに記入し，後日プロトコルを作成した。そして，フィールドノートをもとに，インタビュー調査の発話記録を作成した。

4-2. 結果

生徒２名（Ｏくん・Ｋさん）について，順にインタビュー調査の発話記録をあげる。

〔生徒Ｏくんのインタビュー記録〕

授業前

1	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「これからの音楽の授業を受けるにあたって，今考えていることを教えてください。」
2	Ｏくん	「声のトーンが合っていないし，テンポがワンテンポ遅れているから，そこを合わせたいです。」
3	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「他に考えていることはありますか。」
4	Ｏくん	「クラスがまとまって，やる気になるようにしたい。」
5	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「クラスがまとまるというのは，例えばどんなことですか。」
6	Ｏくん	「クラスがまとまるっていうのは，テンポを合わせるっていうのもあるけど，けんかとかもあったので，クラスみんながまとまるようにしたい。気持ちがまとまるようにしたいです。」
7	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「わかりました。他に考えていることはありますか。」
8	Ｏくん	「先生が言ったことをさらっと流してしまっているので，受け止めて，言われたことを実行できるようにしたいです。」
9	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「わかりました。他に考えていることはありますか。」
10	Ｏくん	「全体だけじゃなくて，一人ひとりが声を出して届けるようにしたいです。」
11	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「わかりました。他に何か考えていることはありますか。」
12	Ｏくん	「一人ひとりの頑張る差があるので，全員が意識を高めるようにしたいです。」
13	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「わかりました。他に考えていることはありますか。」
14	Ｏくん	「いえ，それぐらいです。」
15	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「わかりました。これで終わります。ありがとうございました。」

授業後

1	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「音楽の授業を受けて，今考えていることやできるようになったことを教えてください。」
2	Ｏくん	「声が出る高さや低さが人それぞれで違うので，低い声が出る人は低い音を，高い声が出る人は高い音を頑張って出すというのができるようになってきた気がします。」
3	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「なるほど。それは，どうしてできるようになったのですか。」
4	Ｏくん	「はい。それは，先生に教えてもらったから，できるようになりました。」
5	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「なるほど。他に考えていることやできるようになったことはありますか。」
6	Ｏくん	「先生に発声ができていないと言われたので，頑張っていきたいと思いました。」
7	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「なるほど。その，発声ができていないというのは，どういうことですか。」
8	Ｏくん	「もっと一つひとつの音を丁寧に出すようにした方がいいと言われました。」
9	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「なるほど。その他で今考えていることはありますか。」
10	Ｏくん	「練習が始まる前にざわざわせずに，スッと練習に入れるようになってきていると思います。」
11	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「なるほど。それは，どうしてスッと入れるようになってきているのですか。」
12	Ｏくん	「うん。えーっと，それは，みんなの気持ちが高まってきているからじゃないかと思います。」
13	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「なるほど。その他で今考えていることはありますか。」
14	Ｏくん	「自分はけんハモだから，音取りで歌っていないときもあるから，自分だけはずれているという感じがあるので，もっと自分も入って頑張りたいと思いました。」
15	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「なるほど。その他で今考えていることはありますか。」
16	Ｏくん	「いえ，だいたいそれぐらいです。」
17	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「わかりました。考えを色々教えてくれてありがとうございました。これで終わります。」

〔生徒Ｋさんのインタビュー記録〕

授業前

1	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「これからの音楽の授業を受けるにあたって，今考えていることを教えてください。」
2	Ｋさん	「まず，課題曲の完成度が低いので高められるように頑張りたいと思っています。それから自由曲のほうは，民謡に変わったので，しっかり練習していきたいと思っています。」
3	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「他に考えていることはありますか。」
4	Ｋさん	「時間があれば自由曲の最後のところを練習したいと思っています。」
5	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「なるほど。自由曲の最後のところを練習したいのはどうしてですか。」
6	Ｋさん	「あ，それは，自由曲は4曲で編成されていて，4曲目の最後のところは盛りあがれるようにしたいからです。」
7	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「わかりました。他に考えていることはありますか。」
8	Ｋさん	「いえ，特にありません。」
9	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「わかりました。これで終わります。ありがとうございました。」

授業後

1	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「音楽の授業を終えて，今考えていることやできるようになったことを教えてください。」
2	Ｋさん	「全体についてですか。」
3	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「あっ，全体についてでもいいですし，個人やパートのことについてでもかまいません。」
4	Ｋさん	「はい，じゃあ，全体としては，始めたころより係の人が良く動けていると思っています。そのおかげで練習時間が長くなって，上達できるようになっていると思います。あと，アルトパートについてなんですが，アルトパートだけ，まだ課題曲ができてなくて遅れてしまっていて，ちょっと焦っています。」
5	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「わかりました。その他で何か思っていることはありますか。」
6	Ｋさん	「あっ，自由曲についてなんですけど，指揮と歌が合っていなくて，それでテンポが合わなくなってしまっています。なので，そこを優先して修正していきたいです。」
7	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「なるほど。わかりました。その他に考えていることはありますか？」
8	Ｋさん	「うーん，あっ，この前までは真剣にとりかかれていなかったのですが，最近はわりとまじめに取り組めるようになってきたと思います。」
9	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「なるほど。この前とはいつくらいでしょうか。」
10	Ｋさん	「あっ，それは，先週くらいはー，まだ真剣ではなかったと思います。」
11	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「わかりました。どうして，最近はまじめに取り組めるようになってきたのですか。」
12	Ｋさん	「あっ，それは，本番が近づいてきてー，私もみんなで頑張っていきたい思いをみんなに伝えたりとかしたし，パートごとに全員が頑張りたい思いを確かめ合ったりしたし，あのー，それぞれがだいぶん自覚してきたのもあるのだと思います。」
13	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「そうなのですね。わかりました。その他に考えていることはありますか。」
14	Ｋさん	「いえ，特にありません。」
15	ｲﾝﾀﾋﾞｭｱｰ	「わかりました。考えをいろいろ教えてくれてありがとうございました。これで終わります。」

4-3. 考察

生徒２名（Ｏくん・Ｋさん）におけるインタビュー調査の発話記録の中で，学級全体で曲想をつかもうとしたり，自信をもって響かせようとしたりすること，すなわち，協働的問題解決を実現している場面が，２点取りあげられる。

第一に，Ｏくんのインタビュー記録（授業後）における「２(Ｏくん)．声が出る高さや低さが人それぞれで違うので，低い声が出る人は低い音を，高い声が出る人は高い音を頑張って出すというのができるようになってきた気がします。」の発言である。このＯくんの発言は，自分を含めたテノールパートの工夫によって，学級全体が問題解決に向かっていることを自己評価している発言と捉えることができる。また，その要因は，授業者が男子生徒の変声期における音域の狭さを考慮して，出しやすい部分（音域）は責任をもってしっかり声を出し，音域的に難しい部分は無理せずに歌うよう指示したことに由来する。お互いの状況を理解しつつ，自分の役割をしっかり果たそうとすることの重要性を理解した発言と考えられる。これらの発言から，音楽科合唱指導における授業デザインの視点を，“授業者が生徒実態に応じた具体的な解決方法を示すこと”とした。

第二に，Ｋさんのインタビュー記録（授業前）における「６(Ｋさん)．自由曲は４曲で編成されていて，４曲目の最後のところは盛りあがれるようにしたいからです。」の発言である。このＫさんの発言からは，合唱責任者として，４曲構成の自由曲をどう歌うか全体像をイメージしていることがうかがえる。そして，Ｋさんのインタビュー記録（授業後）における「４(Ｋさん)．始めたころより係の人が良く動けていると思っています。」「６(Ｋさん)．指揮と歌が合っていなくて，それでテンポが合わなくなってしまっています。なので，そこを優先して修正していきたいです。」「12(Ｋさん)．本番が近づいてきて，私もみんなで頑張っていきたい思いをみんなに伝えたりとかしたし，パートごとに全員が頑張りたい思

いを確かめ合ったりしたし，それぞれがだいぶん自覚してきたのもあるのだと思います。」の発言である。授業前から考えていた曲の完成度を高めていくためには，合唱責任者として全体を把握し，練習計画を考えていこうとする意欲が感じ取られる。そして，自分だけでなく仲間とともに意識を変えることによって，学級全体が問題解決に向かうことを意味する発言だと捉えることができる。これらの発言から，音楽科合唱指導における授業デザインの視点を，“問題解決に向かう十分な時間を確保すること”とした。

５．おわりに（成果と今後の展望）

本校で取り組む協働的問題解決授業は，音楽科としてずいぶん前から取り組んできているつもりであった。したがって，今年度は，通常の授業過程から授業デザインの視点を抽出することを試みた。その結果，これまでに音楽科合唱指導における授業をデザインするうえで必要だと感じていた次の２点を明らかにできた。

（１）授業者が生徒実態に応じた具体的な解決方法を示すこと

（２）問題解決に向かう十分な時間を確保すること

今後は，合唱コンクールに向けたパート練習における学びの様相について考察していきたい。

参考文献

文部科学省「中学校学習指導要領」, 2017.

文部科学省「中学校学習指導要領解説　音楽編」, 2017.

松前良昌・天野秀樹「協働的問題解決授業を実現する手立てについての事例研究－音楽科における授業デザインの提案－」広島大学附属東雲中学校, 2017.

松前良昌・濵本恵康・三村真弓「生徒が主体的・協働的に学ぶ音楽科授業の実践－タブレット端末を利用したパート練習の試み－」広島大学附属東雲中学校, 2016.

松前良昌・濵本恵康・三村真弓「基礎的な音楽的技能の効果的な指導法－3年間継続した発声指導の効果の検証－」広島大学附属東雲中学校, 2015.

松前良昌・濵本恵康・三村真弓「高次の学力を支える音楽的技能の効果的な指導法Ⅳ－比喩的表現を用いたキーワードによる発声指導の効果の検証－」広島大学附属東雲中学校, 2014.

松前良昌・濵本恵康・三村真弓「高次の学力を支える音楽的技能の効果的な指導法Ⅲ－比喩的表現を用いたキーワードによる発声指導の実践研究－」広島大学附属東雲中学校, 2013.

三村真弓・松前良昌他『中学校・高等学校音楽科における聴取力育成プログラム開発のための基礎的研究－聴取力に着目した音楽科学力調査をとおして－』学部・附属学校共同研究紀要No. 39, 広島大学学部・附属学校共同研究機構, 2010.